

現場で働くプロとして本当に必要なものってなあに？

佐藤 めぐみ

(福祉学科 2012年卒業)

はじめに

児童養護施設で働いて7年目。まだまだ社会人としての経験も浅い自分ですが、働いている施設では色々な職員の方からたくさんの事を日々学ばせてもらっています。ただ、人の価値観が仕事の基準にもなりがちなこの現場で、自分の考え方に偏りがあるのかな？という疑問が湧くようになってきました。それだけ自分自身を客観的に見られるようになってきたとも言えるのですが、じゃあ正解ってなんだろう？正解はなくても、プロとしてより利用者さん（子ども達）にとって為になる職員ってどんな考えの人なんだろう。

私が福祉に関し関心を寄せてから、これまで受けた刺激や学びを元に、自分らしさ満載でこれから繋がるひとつのまとめをつくってみたいと思いました。

1. なるほどね

「子ども達だって、おしゃれしたりしていると、気付いて“その方が良い”って言うんですよ」。

にこやかにさわやかに大勢の福祉職の人の前で、笑顔ではきはき話すその女性を見て、すごい人だなと思った。

大学4年生の時、子ども家庭支援センター（以下子家セン）の実習に行き、その時実習させてもらった区の養育家庭体験発表会を聞かせてもらった事がある。その時、そのケースの担当児童福祉司の女性が言った言葉だ。

その日は里子さんの女の子と、里母さんや実子の男の子、その日は居なかったが里父さんとの奮闘記を聞かせて貰うといった機会であった。“子どもだって、話を聞かれたり接せられたりする時に『綺麗だな』って思える人のほうがいい、

大人でもそうだと思う”という持論を堂々と話す福祉司は、現場をやっているにもかかわらず出会っていない貴重な考えの人だったのかもしれない。

今現場で男児の子ども達と接する中でも、毎日ジーパンとTシャツより、時にロングスカートを履いたりすると「可愛いね」とほっこりする言葉と笑顔をくれる事がある。私も小さい頃、母がロングスカートを履いた姿がとても好きで、とても“お母さん”なイメージがして温かくなった事を覚えている。

以前担当していたお母さんが、とても綺麗なネイルをして来たことがあった。そういう仕事に就きたいとお話されていたし、よく似合っていて子どもも気付き「この色可愛いよ」と投げ掛けていた。そのお母さんに「佐藤さんもしたらどうですか？絶対似合いますよ」と笑顔で言ってもらった時、辛い思いも悩みも聞いていた為、お母さんが笑顔になれる姿を見て本当に嬉しかった。この一場面だけでは伝わらないかもしれないが、母子の関係がここまでくるのにも非常に時間を要していた為、子どもは勿論、お母さんの変化を見られ、母子の今後を願う気持ちでいっぱいになった。どこにいてもその思いは変わらない。

昔は、『お化粧やおしゃれを楽しむ風潮が福祉の場にそぐわないのではないかな?』と思っていたが、それはあくまでも自分の思い込みであり、TPOは押さえた上でおしゃれを楽しむのは個人の自由である。目に見える形のおしゃれだけではなく、気持ち良い笑顔でいる職員（人）のほう子ども達だって接していて気持ち良いはずだという事は今後も押さえておきたい。

自分の中にあった、福祉職への（勝手な）ネガティブなイメージが変化していったのは、確実にこの福祉司の言葉を聞いた時からなのだ。現場に居る人からの言葉には、事実と勇気があるのだと信じたい。

2. 忘れられない時間と決心

鳥取県倉吉市。きっと人生の中で機会を頂けたからこそ行った場所で、そうでなければきっと行かなかった場所。鳥取砂丘にも行き、砂丘の自然には心を打たれた思い出が残る。

母子生活支援施設は、私がもともと就職したかった第一希望の施設だ。子育てに悩むお母さん達の支援をしていきたいと、大学生時代は家族福祉を専攻していた。

大学生になり、編入学という周りの人とは異なる時間を歩むことになった事は、自分が想像していた以上に負担であり、当時上手く時間を使えなくなった。周囲が就職活動していく波に乘れず、乗っていいのか分からず、何の為に編入したんだっけ？と自問自答する日々が続いた。就職活動は、言い方は悪いがほどほどに行い、一社内定を貰えたところで切り上げた。何せ、4年生で施設実習に行く自分としては、就職活動以上に熱量を注ぐ事がその後に待っていたからである。今思えば、良くあんなに動き回っていたなと思うし、世の就職活動中の学生の皆さん（終えた皆さん）を心から尊敬する。

実習先は2か所希望でき、私はどちらも希望通り行かせて貰う事ができた。

1つは子家センで、もう1つが母子生活支援施設だ。始め、鳥取県と聞いた時は交通費のことしか頭に浮かんでこなかった。しかし、そんな私の表情を見た湯澤教授から「すごく良い施設なんですよ」とお言葉を貰い、嬉しさと、それ以上に緊張の方が勝ったのであった。

鳥取県にある『倉明園』。都内の母子生活支援施設の施設長さん達からは一日置かれる、知る人ぞ知る施設だという事を、私は後々知ったのだった。実習は言うまでもなく、本当に貴重な時間を頂き、思い返すだけで胸がいっぱいになる。実習ノートもとても丁寧に返答頂いたし、質問に対して丁寧に返して貰った。利用者の方々との思い出も、私の中にはたくさん残っているのだが、その中でも特に印象に残っている出来事がある。

ショートステイで緊急保護された母子（子2人）のケースであった。お母さんと2人の子どもの雰囲気がとても良く似ていた。優しそうで、とても不安そうな母子であった。

夜、実習を終え、私は借りていたアパートに戻ろうとしていた。施設の事務所を出ると、一人の男の子が暗がりの中懸命に自転車直していた。その母子の、男の子であった。声を掛けると返答してくれたが、無心に自転車をいじっていて「直らないんですよ」というような事を言っていた。その必死な雰囲気に離れられず、しばらく見守り、あっと気付いて懐中電灯を事務所に借りに行き、彼の手元を照らした。男の子からはお礼を言われて、私が何か話したからかは忘れてしまったが「お父さんがこういうの出来るから」と言った。彼の中で、今母子でこ

こにいる事をどう思っているんだろうと考えた。ふと空を見ると、何にもないからこそ星がとても綺麗で、明るいのは彼の手元だけで、彼の幸せを願わずには居られなかった。ある程度の時間を掛け、彼は自転車を思ったように直す事が出来たらしく、私もアパートに戻った。

施設の職員になりたいと、心から思ったのはこの時が初めてであった。

3. 葛藤があつての今

今の施設に入社が決まったのは、大学4年生の3月末。鳥取県の実習が終わった後、私は内定を頂いていた貴重な会社に頭を下げた。応援してくださった先方の担当者様、私を信じて選択させてくれた父はじめ家族には、本当に感謝している。短期大学では幼児教育を選考していた私にとって、今の施設に入社出来た事は運命的に思えた。

社会人一年目、子ども達にとっても私自身にとっても、全て初めての事で、思い返しても大変な思い出が山ほど出てくる。と思っていたが、実際大変な思い出こそ良い思い出となっているから不思議だ。当時の施設長に、「大変な思いや辛い思いを先にとすると、後が楽になるよ」と言われた事があるのだが、こちらは気が気じゃなかった為「こっちは必死で、慰めてほしいし対策を考えて欲しかったのに」と思った事があった。今思えば本当にその通りであり、まだ青臭い自分に対しての激励だったのだと思う。

ただそれでも、子ども達の試し行動に右往左往していた日々だった。実習日誌より、社会人一年目の時の記録類のほうが恐くて（恥ずかしくて）読み返せない。子ども達の前でも何回か泣いてしまった記憶がある。それこそ恥ずかしい思い出だ。子ども達の前で泣くのは専門職としてどうなの？と言われてしまうかもしれない。ごもっとも。ただ、子ども達が激しく力強くぶつかってくるのに、自分が上手く受け取ってあげられない時、キャパオーバーになって隠れて泣いてしまった過去の自分の事も認められるようになってきた。

子ども達はやはり、ベテランの職員ではなく新人の職員に色々な事を求めてくる。返しが曖昧で、時に子ども自身のほうでコントロールできてしまうからだ。子ども自身は『コントロール』なんて難しい事を考えてはいないが、甘えたい時、応じて欲しい時に存分に我を出し、泣いて怒って職員に要求を出す。それをベテ

ランの職員であれば子どもの特性や生育暦も理解している為線引きが曖昧ではなく、子どもも職員との関係性がある為新人への出し方とは変わってくる。

何度も何度も心は折れたし、そんな中も会議で上手く伝えられず、話せないもどかしさと悔しさでどうして良いか分からなかった。情熱的であるし、熱心であるが、私はもっと人の意見や話を冷静に聞いて頭の中で言いたいことをまとめる力が必要なのである。以前、子家センで実習した時の実習担当の方に「佐藤さんは感受性豊か」と笑って言って貰った事がある。だから、福祉の現場にすぐ入るのはしんどいと思うよといったアドバイスを貰った。本当に温かい親切な方で、その後の進路も気に掛けて頂き、当時報告させて貰っていた。自分の自己覚知に一役下さっている存在の方だ。そして、当時アドバイスして下さった通りの葛藤があった事を、振り返ると気が付く。

先輩職員のようにになりたいと思い、自身の線引きや、対応方法、対応していく中で大事にしていく事等を考えてきていた。ただその中で「経験を積み事だけが良い訳ではない」「子ども達が要求してこないほうが良い訳ではない」という事を感じる自分もいた。そういった気付きも含め、現場の職員からは色々なアドバイスも貰い、可能性を広げて貰っている。一人では考えられない事が沢山あり、周りの意見を参考に、それをもっと深め勉強していく必要があるのだと感じる日々が続いているのだ。

4. 奮起した思い

母子生活支援施設で働きたかった理由は、家族支援というものに関心があった為だ。子どもだけ・親（女性）だけにアプローチするのではなく、その両者に働きかけていきたいと思った。ただ、児童養護施設で働き始め3年位すると、今行っている職務内容は、自分が最も行いたかった事なのではないか、と思い始めた。児童養護施設でも、全く親側へアプローチしない訳ではなく、“子どもにとって”をベースにしながらも親への支援も検討していく。現場で勤め、少し慣れ始めた頃、ようやく気付けたのである。

4年目になり、色々な疑問が頭をもたげるようになった頃、急に配属先がグループホームになった。全く未知の世界であり、先輩方には迷惑を掛ける日々であったし、自分自身戸惑いの連続であった。まず、一宅を任されるのだ。基本一人体制であり、怪我や事故等起こったらまずは自分で動かなくてはならない。子

ども達と買い物に行く機会も多くあり、周囲からしたらあんなに多くの子どもが？と見られる事間違いないの構図だ。自転車に乗り、少し遠くの公園まで遊びに行く機会は母体施設（本園）の子ども達よりずっと多いが、その分職員の緊張感も計り知れない。それまで栄養士が献立を立て、調理師が作っていたものを盛り付けていたが、グループホームでは献立から調理まで全て自分が行う。保護者の方への対応もそうで、子ども達が揃っていても一人で保護者の方へのお話を行っており、環境的に良いのかなと思う事が多々あった。

それでも変わらなかったのは、子ども達の姿である。どこに居ても子ども達は変わらないし、みんな優しく純粋である。正直、グループホームの勤務は大変だが、子ども達にとってより家庭に近い環境で、色々な経験が出来る事を考えたら子ども達にとっては良い環境なのかもしれない。

ただ、その分職員へのスキルも求められるのは、何もハード面（医療ケアや全面的対応等）だけではない。職員がSOSの声を挙げ難い環境ということは、子ども達にとってもそうなのである。

近年、施設内虐待等も問題視されており、ニュース等でも話題になったりもするが、うちの施設は大丈夫なのか。私は、大丈夫なのか。子ども達にとって意味のある存在になれているのか。プラスになる存在になれているのか。いい職員であれているのか。

では、どういった職員が、子ども達からした“いい職員”なのか。

以前、子ども達の養育をする中で大事にしている事、を会議の中で話し合ったことがある。『安全・安心』が一番出てくる職員が多い中、私は堂々と『愛情』と答えてしまった。ほぼ全ての職員が自分が言った後もそう話していく為、非常に恥ずかしかった事を覚えている。勿論私も、安心感や安全を軽視してはおらず、当たり前に必要なものだと思っている。ただそれが始めに出てこないというのは、プロとして失格だったのかなとうなだれた。

自分の考えを肯定したい為ではなく、思う事は「けど正解ってなんだろう」という事だ。先述したが、じゃあベテランの先輩が言う事は全て正しいのか。対応の正解ってあるのか。

それを決めるのは、今見ている子ども達がいつか大人になっていく中で図れるものなんだろう。

自分の小さい頃を考えると、両親や先生との関わりってそこまで明確に覚えていない。けどやっぱり、インパクトに残っている出来事ってあるし、親から受けた愛情や祖父母にして貰って嬉しかった思い出って残っているものだ。勿論、その逆もそうであり、嫌だった事や怒られた事、自分がした失敗も覚えている。そんな経験をしていく中、今の自分になったんだなと思うと、やはり今だけで正解を図れる仕事ではないのだと痛感する。

今見ている子ども達が大きくなった時、成長していく中で、職員の顔を思い出さなくても良い。けれど、『あなたは決してひとりではないんだよ』というメッセージは伝えたいし『あなたのことがとても大切なんだよ。あなたも、自分や周りの人を大切にね』という思いは子ども達の中で残っていった貰えたらと思うずにはいられない。そう考えると、やっぱり私が一番大切なものは、どれだけ恥ずかしくても『愛情』だと胸を張って言ってしまうのだろう。

おわりに

児童養護施設から大学に進学する子ども達のパーセンテージが、非常に低い事は社会人の人なら大体知っている事実だと思う。それは目に見える不平等であり、しかしその不平等はずっと前からあるのだ。

近年、昔と比べて『虐待件数』は多くなっている。それは、昔より各人の意識が高くなり、通報する人の割合が増えたからという見方も強いのだが、実際はどうなのか。個人の見解ではあるが、恐らく実際件数も増えたのだと思う。それはなぜかの議論は別の機会で検討していく余地がある事だが、その一つに虐待の連鎖が続いているという事がある。そういった子育てでしかない、親の愛情を受けて育ってこなかった、という『親』が多い。子だけでなく、親もまた傷を負ったままなのである。

．．．

拙いまとめになってしまったかもしれませんが、もし福祉の世界にいろいろな、関心あるなという方には、是非気軽な気持ちで一度来てもらいたいです。その中で、現場の職員ではなくても自分に合った福祉への関わり方がきっとあるはずで、

そういった関心が広がる世の中になって欲しいと願って記載しました。

そして、現場に居る以上、子ども達にとって“来て（出勤して）ほしい職員”と思ってもらえるよう、安心感を与え、たくさんの愛情をこれでもかというほど降り注げる職員であり続けられるよう、目指していきたいものです。ただそう思いつつ、「小さいことでイライラしちゃだめよ、自分」「いやいやイライラを見せるのも一つだけど、自分よがりな支援は絶対にだめ」等、色々頭の中で浮かんでは消えている…と思うとやはり正解はないし、正しい事だけがベストなのではない、これからも試行錯誤は続くのだ、と思います。

『現場で働くプロ（専門職）として』必要なものを、働く前の学生時代から、働いている現在に至るまで自分なりに考えてきたまとめです。